育児
Parenting

シングルパパ歴6年。娘と過ごす「今」が大切

NPO法人　日本体育食育協会　代表理事　石川英之さん/32歳/富士市

学生結婚して22歳で父親になりました。が、諸事情で26歳の時に離婚。福祉関係の大学で父性と育児について勉強していたこともあり、娘も僕によくなついていたので、引き取りました。しかし若かったせいもあり、一時期は両親に娘を任せっきりで、仕事とフットサルに明け暮れていました。

そのうち、娘が情緒不安定気味になり、親としての自覚がなかった自分を大反省。以来、親としての責任を果たそうと、娘としっかり向き合うようになりました。今、小学４年生。夕食後、宿題を見てやり、娘が寝るまで一緒に過ごします。学校のPTAにも積極的に参加しています。テレビとかお菓子とか、ささいなことでしょっちゅうケンカしますが、それも仲良しの証拠かな。最近、娘が僕の世話を焼くようになり、なんだか小さな奥さんが家にいる気分です。

当面、再婚は考えていません。子どもの成長はあっという間ですから、娘と一緒にいられる今を大切にしたい。2008年にスポーツと食育をテーマにしたNPOを設立しました。食事とスポーツ、両面からのサポートで元気な子どもたちを育てるのが目的です。今後は自分のシングルパパ経験を生かして、孤立しやすいシングルパパ、ママをサポートする仕事もしたいと思っています。

パソコンの壁紙は娘の笑顔。
毎日の元気の源です

- ●職業：NPO代表理事
- ●年収：200万円〜300万円
- ●家族：両親と子ども1人

育児って、先が見えなくておもしろい

M・Aさん/女性/30歳/静岡市

育児の合間に、お気に入りの紅茶で
一息つくのが日課です

- ●職業：専業主婦
- ●年収：なし
  世帯年収約500万円
- ●家族：夫と子ども1人

短大を出て就職。3年間がっちり働いて貯めたお金で夢だった海外留学へ。帰国後再就職し、28歳で結婚しました。29歳で出産。「20代は思いきり楽しみ、30代は子育て」と考えていたので、今までのところ予定通りの人生です。育児はそれほど大変ではないですね。娘はあまり泣かないし、よく寝る子なのでストレスが少ないかもしれません。同い年の夫は協力的。ご飯を作ってくれたり、マッサージをしてくれたりします。

最近、マイホームが欲しいと思うようになりました。そのためにも、子どもが小学校に入学する頃には働きたい。夫も「家を建てるなら働いてくれないと困る」と言っています。でも独身時代のようにバリバリ働けるかといえば、実家も遠く頼る人がいないため、難しそうです。家から近いところでパートするというのが現実的なのかな。

正直言うと、いま現在、5年先のことが想像できません。これまでは「恋愛して結婚」とか、「妊娠して出産」などある程度予想できたけれど、育児は毎日が未知の世界。ハイハイを始めたり立てるようになったりと一日一日がとても濃く、将来のことを考える余裕がないんです。そのうち考えなくてはいけないけれど、娘の成長をつぶさに見つめられるのは今だけ。しばらくは、娘との暮らしを満喫しようと決めています。

どんな30歳になりたい？どんな30歳だった？
20代の若者とアラフォー以上の世代がつぶやく30文字の30歳

Under30

決めつけない、落ち着かない、やわらかく、
悩みだらけの30歳でいいんじゃないか。
（22歳・男）

二児のパパとなってイクメンのホシと
呼ばれるようにがんばってる。
（20歳・男）

バリバリ仕事して、でもさすがに、
そろそろ結婚相手を見つけてるはず。
（20歳・女）

私も夫も働き、家事も育児も一緒に。
そんな姿が30歳の私の理想！
（20歳・女）

東静岡の高層マンションで優雅に暮らす。
（21歳・男）

仕事に慣れて余裕が出たら
自分の時間を大切に使いたい。
（21歳・男）

先生として、子どもたちに“できた”っていう
経験をたくさんさせたい。
（21歳・女）

できれば仕事も続けて、
でも、結婚もしていてほしい。
（21歳・女）

Over30

みんなが買うなら、うちだって！
貯金もないのに、マイホームを買った年。
（49歳・男）

長男2歳。子どもにも仕事にも
追い立てられ、日常生活の記憶なし。
（37歳・女）

彼女なしで迎えた30歳の誕生日、
体が重くて起きられなかった。
（57歳・男）

いろんな意味であきらめを知らなかった。
青くて若くて元気いっぱい！
（44歳・女）

残業、残業、映画、読書、読書会、
食べ歩き、ときどき恋愛（？）
（57歳・女）

子育て。仕事。遊び。なんでもできた、
若かった。88年の30歳。
（53歳・女）

Japan as No.1　アメリカを買い占めろ！
半ば本気で。
（63歳・男）

詩人と社会学者の視点を持つ水無田気流さんに、
今号のテーマの総括をお願いしました。
この30年の日本社会の変容が、
30歳の価値観、意識にどう影響しているのか。
「標準的」な生き方から、「自由」な生き方へ。
彼らが向かう先には、どんな未来が見えてくるのでしょう。

水無田気流（みなした・きりう）
詩人・社会学者。詩集に『音速平和』（中原中也賞）。
評論に『平成幸福論ノート』（本名・田中理恵子にて執筆）

アラサー世代と日本社会の変容

現在の三〇歳前後の世代は、大まかに言って「ポスト団塊ジュニア世代」に相当します。就職氷河期の常態化が言われますが、就職年によっては運よく「いざなみ景気」に恵まれた人たちもいたことでしょう。ただ基調としては、デフレやグローバル化などの影響より、若年層を中心に総体的賃金低下傾向は否めず、何より子ども時代にバブル景気は崩壊。さまざまな意味で「不安」が拡大した九〇年代に、思春期を迎えた世代です。

九〇年代は、情報技術の進展を基盤に、若年層のコミュニケーション形態やメディアとのつき合い方も大きく変化しました。とりわけ女性は「コギャル世代」とも重なり、一〇代からケータイやネットに触れてきた世代です。いわば、現在の情報消費スタイルの最先端を走ってきた人たちです。座談会では「コストパフォーマンスでモノを選ぶ」傾向が指摘されましたが、これもその「成果」です。

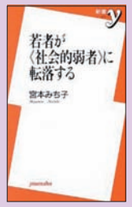
バブル世代までは、「みんなが羨むものを消費する」ことに価値が置かれていましたが、アラサー世代以降にはそのような志向性が乏しく、「情報を上手く活用していいものを安く買う」ことのほうに価値が置かれています。「ブランドものだから買う」「〇歳になったから持ち家や車くらいないと格好がつかない」といった感覚も乏しくなってきています。ちなみに、ポスト団塊ジュニア世代を代表するアイドル、嵐の歌詞には自動車が登場しません。これは、たとえばバブル期にユーミンやドリカムが大人のデートの象徴として車を歌い込んだのとはきわめて対照的です。

さて、私は日本の若年層の「気分」を測る際、「一九九五年に何歳であったか」が大きなポイントになると考えています。この年は初頭に阪神・淡路大震災が発生し、三月に地下鉄サリン事件が起きました。同事件が海外に与えた衝撃も大きく、当時英語圏の雑誌には「もはや日本は安全ではない」との論考が数多く並んだのを覚えています。また残念なことに、この犯罪手法はその後都市型テロの手法に負のお手本を示してしまいました。九五年は、日本の安全神話崩壊元年ともいえます。現在三〇歳前後の人は、多感な一〇代半ばでこの年を迎えています。

九〇年代前半は、細川内閣誕生により、長きに渡る五五年体制が崩壊。「労働・家族生活・余暇」の確固たる関係性も、再編を迫られることとなりました。後半は、サラリーマン世帯でも共働き世帯が専業主婦がいる世帯を上回り、現在も増加の一途をたどっています。いわば「大黒柱の夫と専業主婦の妻」からなる「標準世帯」が、数の上でも多数派から転落したのが九〇年代後半です。また九九年の派遣法改正は、若年層を中心に非正規雇用化に拍車をかけました。

だからアラサー世代は、「一言で表せない世代」という意見がまさにぴったり。「標準的」な生き方や暮らし方が見えづらくなった世代でもあります。でも、それゆえ「自由」な世代。何歳になったから、男性だからといった既存の枠組みにとらわれず、自由な発想で活躍していける世代ともいえます。

Books & Cinemas



ふじのくにNPO活動センター
センター長
荻野 幸太郎さん

若者が『社会的弱者』に転落する

宮本みち子 著
洋泉社

「就職しない」「結婚しない」若者たちの実態に、社会経済構造や、ジェンダーの観点から迫った新書。著者の主張が、「豊かなニッポンの真の危機　若者バッシングしてる場合じゃない！　長期停滞、不平等社会の進行する中で起きている問題」という帯文に凝縮されている。

2002年にこの本が発売されて以降、パラサイト・シングル論に代表される「今の若者は、豊かな時代に甘やかされて育ったから、いつまでも親に寄生して自立できないのだ」というステレオタイプの若者批判の不正確さが次々と指摘され、若年世代が抱える労働問題や貧困問題への関心が一気に高まった。

著者の宮本みち子は1947年生まれの団塊世代。専門は家族社会学、青年社会学。NHKスペシャル「ワーキングプア」などに出演したことで一般にも知られるようになった。包括的な青少年政策の必要性を訴え、若者の社会参画を促進するシチズンシップ教育や、何度でも再挑戦できるための職業教育の充実を提言している。

静岡大学教授
男女共同参画担当副学長
舩橋 惠子さん

稼ぐ妻・育てる夫
夫婦の戦略的役割交換

治部れんげ 著
勁草書房

「稼ぐ夫・育てる妻」が多い中で、少数だが逆の組み合わせを選択する夫婦がいる。著者の治部さんは、自立したジャーナリストで、夫（当時、経済学者を目指す大学院生）の数年にわたるアメリカ留学を機に、自らフルブライト奨学金を得て、1年間ミシガン大学女性教育センターで調査研究に従事した。高学歴高所得階層のアメリカ人52人に、共働き夫婦の家事育児分担についてインタビュー調査を行った結果を、本書にまとめている。そのなかで、「専業主夫」を選んだ男たちの声がおもしろい。アメリカでは、男性の失業が頻繁に起こる。夫より稼ぎの良い妻が層をなしている。子どもを保育園に預けないで家庭で育てたい。こうした要因が重なると「稼ぐ妻・育てる夫」が合理的選択になるのである。性別分業を逆さにしてみると、何が見えてくるだろうか。あわせて、日本とは異なるアメリカの労働市場、育児支援政策のあり方、保育園のあり方なども参考になるだろう。

ライター
行貞 公博さん

冒険者たち

監督：ロベール・アンリコ
販売元：アミューズビデオ

厳しい受験戦争を勝ち残って一流大学に入学し、一流企業に入社すれば将来安泰と多くのひとが信じていた80年代の後半、私はそんな価値観から自由になることばかりを考えていた。1967年に公開された「冒険者たち」を初めて見たのは、そんな気分にけりをつけきれなかった20代半ばの頃である。

この映画は、免許を剥奪されたパイロットのマヌーと車のエンジンの開発に挫折したローラン、そこに芸術家としての成功をあきらめかけているレティシアが加わり、コンゴ沖の海中に眠る財宝を探しに行く物語。孤独を心に秘めている彼らの挫折と友情が慎ましく描かれ、作品全体に寂寥感が漂う。40年以上前の作品ではあるが、この感覚に共感できる30代は多いのではないだろうか。

初めて見てから十数年。今まで幾度か見直したが、空騒ぎのような時代にはきっと馴染まないこの三人が、お互いのかけがえのなさに気づいていく姿は色褪せることがなく、いつでも寂しさや切なさとともに乾いたまぶしさを放っている。

静岡市女性会館（アイセル21）館長
松下 光恵さん

活動家一丁あがり!
社会にモノ言うはじめの一歩

湯浅誠、一丁あがり実行委員会 著
NHK出版新書

30歳前後の世代は、就職氷河期に学校を卒業し、厳しい雇用環境の中でがんばっている世代です。昨年、静岡市女性会館で行ったこの世代の独身女性を対象にした連続講座は、夜間開催にも関わらず多くの参加がありました。参加者の約6割が転職を経験し、その年収は5割強が300万円未満。堅実な生活ぶりが窺えました。追加講座「女性の権利が今ある理由」では、働く上での権利について初めて考えたという人がたくさんいました。

本書は湯浅誠さんが中心となって、社会にちゃんとモノが言える若い人を増やしたいと始めた特別講座「活動家一丁あがり!」の記録が中心です。生きるに値する社会、誰も排除しない社会をつくるために、ダサい、怖い「活動家」ではなく、柔軟に自ら活動の場をつくることのできる「活動家」を育てることを目的としています。思いを行動に変えて社会を動かそうという湯浅さんたちの気持ちが伝わり、一気に読みました。

輝く30歳女子

編集員　いちかわみやこ

59号の感想をお寄せください

◆QRコードから
◆E-mail　kouryuukaigi@ka.tnc.ne.jp
◆FAX　　054-251-5085
いずれかの方法でお願いします。

編集後記

写真前列左から
増渕礼子
鈴木亜希
市川美弥子
後列左から
利根川初美
荻野幸太郎
平尾夏生
梶山雄紀

●私はいわゆる“ロスジェネ世代”。ブランド品やマイホームなど、「所有したい」という感覚を引きずる最後の世代かも。今回「モノ、知恵、つまり生活全般を分かち合う」という30歳の価値観にふれ、見習いたいと実感。（編集長・鈴木亜希）

●まずは「ねっとわぁく」の編集に関わることができ感謝です。紆余曲折の末、たどり着いた「30歳」は私にとって未知の世界。色々なお話を伺い、しなやかに時代に沿っているような印象を受けました。30歳に、皆に幸あれ。（市川美弥子）

●今回は、自分と同じ「30歳」をテーマに、様々な人生の話を聞くことができました。80年代、90年代、そしてゼロ年代の「社会の歴史」が、「個人の歴史」とどう交わってきたのかを、改めて考える良い機会になりました。（荻野幸太郎）

●取材を通してたくさんの30歳の方とお会いすることが出来ました。率直な感想は、「30って意外と若いんだなあー」。私も10年後にそんな風に思われる大人になっていたいものです。（大学生・平尾夏生）

●30歳だけでなく、いろんな世代の方々と関わることのできた編集は、とても新鮮でした。また、違う世代の方と接することで、自分たちの世代の良さも悪さも分かるのかなと。同世代だけで固まってばかりはもったいないなーと感じました。（大学生・梶山雄紀）

●「経験が邪魔をする」。今号の編集はまさにそんな状態でした。先が読めない時代だからこそ、異世代がお互いを認めあい、わかりあう努力をしなくては。いつまでも、「昔はよかった」なんて言ってちゃダメです。（アドバイザー・増渕礼子）

●私の30歳といえば長男を出産した年。息子がもう中学生ということは私もそれだけ30歳から遠ざかってきたということ。最近の30歳の方々のお話を聞いてずいぶん価値観が変わってきたのだと実感しました。「シェアする」感覚は今後身につけたいと思います。（デザイナー・利根川初美）

富国有徳の理想郷―しずおか
ふじのくに
Shizuoka Prefecture

ねっとわぁく

2011/10/3　Vol.59

発行日／平成23年10月3日
〒422-8063　静岡市駿河区馬渕1丁目17-1
企画・編集・発行／あざれあ交流会議グループ
TEL／054-250-8147　FAX／054-251-5085

編集長／鈴木亜希
編集員／市川美弥子、荻野幸太郎、平尾夏生、梶山雄紀
アドバイザー・増渕礼子
デザイナー・利根川初美

「ねっとわぁく」は年2回（3月、10月）発行します。県民生活センター、県内の男女共同参画センター、市町役場、公民館、公立図書館、文化会館などで配布しています。会社やご友人にもぜひ回覧してください。